

ナゴヤドーム放送席に VISTA 1 を導入



実際に使用してみて

こうして新しく生まれ変わったBサブですが、実際に使用してみて、やはりVISTAシリーズほどの卓でも操作性が変わらない、という点が特に気に入っています。既にVISTA 7を使用しているスタッフは大した説明を必要とせず、すぐにオペレーションが可能でした。人によってメーター配置や表示するものが違っていたり、フェーダー配置や色など自分好みにカスタマイズ出来る部分が多くあり、セッティングのやりがいがあるのもいいところです。新たな機能であるヒストリー表示はアクセサリー等のタッチノイズの発見に役立ち、バスアサインを一覧表示できるCONTRIBはアサインの確認作業が簡単にでき、トラブル時の対応が格段に速くなりました。また音質については、同じ番組であるにもかかわらず、以前よりも音が良く聴きやすくなったとの嬉しい評価を社内と社外から得ています。



ナゴヤドーム VISTA 1

当社は音声の中継車を持っていないため、ナゴヤドームでの野球中継の音声制作はすべて放送室で行っています。昨今の野球中継は地上波だけではなく、BS・CS、インターネット配信など多様化しており、1つの試合でも様々な用途にあわせたコンテンツを同時に制作する必要があります。今まではアナログ卓を2台並べて、限りあるI/Oの中で何とかやりくりしてきました。しかし番組規模に合わせて毎回セッティングの組み換えを行う必要があり、広くない放送室の中で時間に追われての作業は毎回かなり辛い作業でした。

設備の老朽化で音声卓の更新を検討していた際にVISTA 1が発表になり、機能的には申し分ない上にDSP一体型で“これなら置ける”というコンパクトさが決め手となり、2013年2月に導入しました。I/Oはオプションカードで拡張し、現在ではMADIの外部インターフェースも繋いでいますが、コンパクトながら十分な処理能力を持ち、VISTAを名乗るだけの音質、機能を維持している事を実感しています。拡張性の高さにも助けられ豊富なI/Oを構築できた事で、野球シーズン中ほぼケーブル抜き差し無しで済みました。デジタル卓では当たり前になっているモジュール毎のディレイだとか、自由なルーティングなど、これまでのアナログ卓ではできなかった事ができる様になり、ミッ

クスの自由度が高くなった事で番組の質の向上にも繋がっています。中継日以外はドームには行けないという状況の中、VirtualVistaを使って事前に仕込み作業ができるというのも現場での作業時間短縮に大いに役立っています。

最後に

同時期に2台のSTUDER製の音声卓を導入したわけですが、評判どおりの操作性と確かな音質を実感しております。仕事の中で他社の音声卓を使う機会も多々ありますが、VISTAなら簡単にできるのになあと思ってしまう事も度々あります。Bスタジオもナゴヤドームも卓に座るとやる気が沸いてくるような、スタイリッシュな設備を構築できたと思います。最後に、工期の短い中ご尽力いただきました、スチューダー・ジャパンブロードキャスト、テクト、日東紡音響エンジニアリング、他関係スタッフの皆様へ深く感謝を申し上げます。

